幼兒の教育

昭和十年十二月

廊下で

泣いてゐる子がある。涙は拭いてやる。泣いてはいけないといふ。なぜ泣くのと尋ねる。弱蟲ねえといふ。……隨分いろ〳〵のことはいひもし、してやりもするが、ただ一つしてやらない。泣かずにゐられない心もちへの共感である。

お世話になる先生、お手數をかける先生。それは有り難い先生である。しかし有り難い先生よりも、もつとほしいのは嬉しい先生である。その嬉しい先生はその時々の心もちに共感して呉れる先生である。

泣いてゐる子を取り圍んで、友達が立つてゐる。何んにもしない。何んにもいはない。たゞさも〳〵悲しそうな顔をして、友達の泣いてゐる顔を見てゐる。なかには何だか譯も解らず泣きそうになつてゐる子さへゐる。

（倉橋惣三）